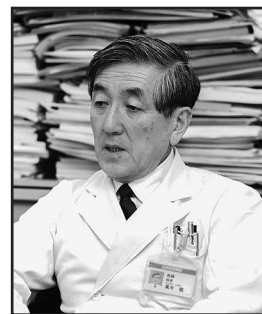


萬年 徹先生を偲んで

岩田 誠

メディカルクリニック柿の木坂

故 萬年 徹先生
© 撮影田沼武能

萬年徹先生ご略歴

1955 年	東京大学医学部卒業
1956 年	東京大学第三内科入局
1963 年	フランス政府給費留学生としてパリ、サルペトリエール病院に留学
1964 年	東京大学医学部神経内科入局
1972 年	東京都養育院附属病院神経内科医長
1973 年	東京大学医学部神経内科講師
1982 年	厚生技官、国立病院医療センター神経内科医長
1984 年	東京大学医学部神経内科教授
1987 年	日本神経学会第3代理事長
～ 1996 年	
1991 年	三井記念病院副院長
1993 年	同院院長
2009 年	同院名誉院長

まだ私が医学部学生だった時、東京大学病院に神経内科が開設されました。1965年のことです。神経学に興味があった私は、その科の病室で萬年徹先生に出会いました。外来実習（ポリクリ）で診察した Guillain-Barré の患者さんが入院されたので、病室に行ってみたところ、その患者さんの受け持ちが萬年徹先生だったからです。そこで、将来神経内科に進みたいと申しましたら、それなら兄のところで脳の神経解剖の勉強をするとよいとおっしゃって、医科歯科大学の解剖学教授だった萬年甫先生を紹介して下さいました。そこで、医科歯科大学に行き、甫先生の研究室で人脳の髄鞘染色連続切片標本のスケッチを始めました。1966年の春のことです。医科歯科に通い出してしばらくした時、甫先生は日本神経学会総会における脊髄の血管性障害のシンポジウムで講演されるため札幌に行かれましたが、伝え聞いたのは、そのシンポジウムでは甫先生が脊髄血管の解剖学の講演をされ、徹先生が脊髄血管障害の臨床病理の講演をなさるということでした。それがきっかけで、萬年徹先生は、冲中内科に入局された後、浴風会病院で老年者における脊髄血管障害の臨床病理学的研究をされたことを知りました。1963年に「臨床神経学」に発表されていたその論文を読んで驚いたのは、高齢者の剖検で得られた300例の脊髄について、前・後脊髄動脈とそこに流入する根動脈の形態を克明に調べておられたことでした。それだけでなく、そのうちの130例において作成した顕微鏡切片を詳細に観察しておられ、脊髄血管障害の病理像を

明らかにされました。

こうした骨の折れる研究を、時間をかけてコツコツとなさった裏には、学生時代の萬年徹先生が、兄上がおられた小川鼎三先生の主宰される解剖学教室で、小川先生が作成される動物脳のアトラスのために、猫の脳の髄鞘染色連続切片のスケッチを黙々と続けられたということがありました。その時に描かれた31枚の見事なスケッチは、1988年に兄上の萬年甫先生が、二十世紀最大の解剖学アトラス「猫脳ゴルジ染色図譜」を出版された時、そこに掲載されました。

萬年徹先生は、1963年から1年間、仏政府給費留学生としてパリ サルペトリエール病院の Garcin 教授の下で臨床神経学を学ばれ、帰国後、豊倉康夫先生の下で開設されたばかりの東京大学神経内科に入局されましたが、そこでなさった Onuf 核の病理形態学研究は、世界的に有名なものとなりました。発端は、ALS では感覚障害、尿便失禁、褥瘡、外眼筋麻痺の四つが生じにくいことから、豊倉康夫先生がこれを ALS の四大陰性徴候と呼ばれ、その謎を解くことが ALS の病態解明に重要だと言われたことでした。これに啓発された萬年徹先生は、ALS と多系統萎縮症剖検例の腰仙髄を詳細に調べられ、尿便失禁のない ALS では第2仙髄前角の Onuf 核神経細胞が、周囲の前角細胞が消失しても残存するが、高度の失禁を呈していた多系統萎縮症では、この核の神経細胞が消失していることを見出されました。尿便失禁の有無と Onuf 核の関係を明らかにしたこれらの論文はたちまちにして全世界に広まり、HRP を用いた幾多の動物実験で、この核の神経細胞が外肛門括約筋や外尿道括約筋を支配していることが明らかにされました。それだけでなく、萬年徹先生は、直腸切断術施行後に亡くなり剖検された患者の仙髄において、Onuf 核神経細胞の逆行変性像を見出され、この核の神経細胞が外肛門括約筋の支配細胞であることを、ヒトにおいても証明されたのです。このようなことから、我々の師豊倉康夫先生は、この細胞群を形態学的に初めて記載したのは Onuf だが、この細胞群の機能を明らかにしたのは、疑いもなく萬年徹先生であると言われ、この核は Onuf-Mannen's nucleus と呼ばれるべきであると主張する論文を書くようにと、筆者に命じられました。

1984年に、萬年徹先生は豊倉康夫先生の後を継がれて、東京大学神経内科の第二代教授に就任されました。その時の、医局員の研究に対する先生のモットーは Laisser-faire、すなわち“や

りたいことをしなさい”ということでした。教室全体の研究方針を決めるようなことをなさらず、各医局員が望むような研究を行うことが出来るよう、学内・外の様々な研究室への国内留学を勧められ、一つの専門領域や、一つの病気に対して教室を挙げて取り組むというような方針を嫌われたのです。すなわち、先代の豊倉先生以来の教室の研究方針の基本を継がれ、それを更におし進めようとされたのです。そのため、萬年徹先生ご自身の研究の基礎は、神経疾患の臨床病理対応研究にありましたが、決してそのような研究分野だけに留まることなく、神経内科学を取りまく広大な神経科学の研究範囲を視野に入れつつ、若い研究者に対して自由な研究環境を作ることにつとめられたのだと思います。

萬年徹先生は、椿忠雄先生の後を継いで、1987年に第3代の日本神経学会理事長になりました。筆者は、椿理事長の時代から学会事務局の責任者である総務幹事の役を勤めさせていたでしたが、1996年に先生が理事長の職を辞されるまでそのまま総務幹事に留まり、事務局の大内明恵さんと共に、日本神経学会の事務的な仕事をさせて頂きました。半世紀以上にわたり、個人的にも真の兄の如く筆者を導き育て導き下さった萬年徹先生、ありがとうございました。今は安らかに眠りください。

合掌

令和6年1月20日

文 献

- 1) 萬年 徹. 老年者における脊髄の血管性障害に関する研究—臨床病理学的考察—. 臨床神経 1963;3:47-62.
- 2) 萬年 甫. 猫脳ゴルジ染色図譜. 東京: 岩波書店; 1988.
- 3) Mannen T, Iwata M, Toyokura Y, et al. Preservation of a certain moto-neurone group of the sacral cord in amyotrophic lateral sclerosis: its clinical significance. J Neurol Neurosurg Psychiatry 1977;40:464-469.
- 4) Mannen T, Iwata M, Toyokura Y, et al. Notes on a certain moto-neuron group of the sacral cord in ALS and the Shy-Drager syndrome. In: Tsubaki T, Toyokura Y, editors. Amyotrophic Lateral Sclerosis. Tokyo: University Press; 1979. pp. 201-207.
- 5) 萬年 徹, 井上聖啓, 豊倉康夫. 外肛門括約筋の脊髄支配中枢について. 神経内科 1978;9:82-85.
- 6) Iwata M. Onuf-Mannen's nucleus. Japan Medical Association Journal 2011;54:47-50.